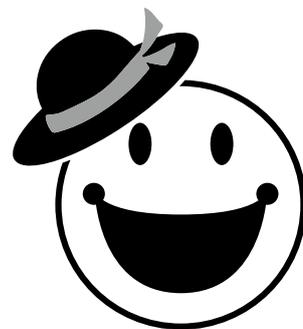


「全少」を日本一研究する指導者による提案

ZENSHOに

挑戦しよう！

養正館館長・渡辺貴斗



第7回

## やる気を出す（その4） 教え子は指導者を映す鏡

### ◆主体変容＝人に求めず自分が変わる

私が中学生の頃、音楽室の掃除の班長になったときのことです。班員はやる気がなく、ハウキと雑巾で毎日野球です。私は、毎回「掃除やれよ」と連呼し、やがてそんな自分にいい加減、辟易（へきえき）していました。ある日、「いくら言っても誰も動かないなら、相手に向けるそのエネルギーを掃除に向け、黙って一人で全部やろう」と決めました。掃除の時間より早く行って一人で済ませる、それを2～3日続けました。次の日、早めに音楽室に行くと、なんと班員が掃除の時間よりずっと早い時間に来て、掃除を全て終わらせていたのです。

そのとき、誰かに何かをやらしてもらおうときは、口うるさく命令するのではなく、まず自分が率先して動かななくてはならないのだということを体験しました。これは、松下幸之助氏、原田隆史氏などが提唱する「主体変容」であることを、大人になってから知りました。

原田隆史氏は、主体変容を「自分が変わることで周りを変えていくこと」と定義しています。つまり、不平不満を言って相手を変えようとするのではなく、まず自分の行動・態度を変えることによって、気付いたら相手が変わっていた、不思議と周りの人が応援してくれるようになっていた、ということです。

### ◆子は親を真似ているだけ

子ども連れのお母さんが、近所のおばさんにばったり会ったとします。「ほらっ！きちんと挨拶しな

い！」とお母さんが子どもを叱ります。何か違和感を感じませんか？

問題点は、まずお母さんが挨拶していないことです。この場合、子どもは無理に挨拶しなくても良いと思います。「こんにちは」と笑顔で挨拶を交わすお母さんと近所のおばさん。そのあと大人二人で「いい天気ですね」などと2、3言葉を交わし、それを傍らで見ていた子どもは、「挨拶って、いいものだなあ」と、じんと感じ入ります。次にまた、二人がおばさんに会ったとき、今度は子どもから率先して挨拶するようになっていることでしょう。

口うるさく言うよりも、挨拶の良さを手本として見せる、また、そのような意図がなくとも、親が「挨拶は良いもの」と感じていれば普段の行動にも自然と表れますから、必ず子どもにも伝わります。挨拶しない子は、たいてい、親も挨拶していません。よって、普段、家庭で挨拶していないのに、自分の都合で急に子どもに「挨拶しろ」と言っても、それは無理な要求です。無理強いすると「挨拶は嫌なもの」となり、口うるさいお母さんの前だけで挨拶する子になります。挨拶できる子になってほしかったら、まずお母さんが率先して挨拶する姿を見せることです。

### ◆教え子の姿が、指導者の姿

「うちの道場生は返事もしない」「挨拶しなくて、試合に行ったとき恥ずかしい」など、日々の指導で困っている指導者もおられるかと思います。その原因は、もしかしたら指導者本人が返事、挨拶してい

ないからかもしれません。

私の道場生も良くできているとは言えませんが、子どもたちの声が小さいときは、私自身の「声が最近、小さいな」と反省します。「声出せ！返事しろ！」と声を枯らすより、指導者が明るく大きな声を出すと気持ちよく子どもたちは応えてくれます。

よく、「子は親を映す鏡」といいますが、「教え子は指導者を映す鏡」です。子どもを見ればどんな指導者（もしくは親）か分かります。「子どものふるまいには、子どもに何も責任は無い」、ということをお母さんも指導者も自覚しなくてはなりません。「挨拶しろっ！」と怒鳴っている指導者がいますが、「普段、自分は挨拶していません」と自ら喧伝しているようなものです。

### ◆本気の指導が、本気にさせる

指導者は「できたら勝たせてあげたい」と思っています。なかなか達成できないのはなぜでしょうか？ 答えのひとつは、指導者が本気で「必ず勝つ！」と思っていないからです。自分の道場生は優勝どころか1回戦負けだろうと思って指導していると、選手は早々に負け、決してまぐれで優勝したりすることはありません。

しかし、指導者が本気で選手を「優勝させる」と心に決め指導しますと、その情熱が子どもの心を動かし、子どもも本当に優勝できると信じ、目の輝きが変わり、実際に好成績を収めていくのです。

まず、「この子は必ずできる」と信じ切ることが大切です。子どもが本気にならないのは、周りの大人が本気になっていないのが原因ではないでしょうか。

ただし、気を付けなくてはならないのは、大人の自己満足だけで「優勝させたい」では、子どもが、大人の欲求を満足させるだけの道具になってしまいます。子ども本人が主体で、周りの大人が応援するという関係が大前提です。そして、本気の指導をすれば、すぐに目に見えて結果が出てくることでしょう。

#### PROFILE

■渡辺真斗 TAKATO WATANABE

1968年4月20日生まれ。7歳から父である館長から厳しく空手の手ほどきを受ける。先代が病氣となったことから一大決心をして、養正館を継ぐ。児童心理学や成功哲学を研究して子どもたちの「心をつくる」指導法に切り替え、2014年、2015年と2年連続で全少7名入賞させる。道場経営でも、一道場で300名を超える大躍進。

日本空手道鴻志会空手道場養正館 / 静岡県沼津市本田町 11-12



## Column

### オーストラリアの全少

オーストラリア空手道連盟ナショナルチーム形コーチである、クレイグ・カタニア(Craig Catania) 先生が8月17日、養正館にて形セミナーを行いました。3時間、お互いのバツイ大をセミナー形式で細部まで紹介しました。

クレイグ先生はオーストラリアトップレベルの指導者で、生徒さんの多くは世界レベルで活躍されています。7月3～5日に、クオアチアで行われた第8回ユースワールドカップ(WKF主催 KARATE1 YOUTH CUP)にて、中3のHolly Boscottさんが優勝。また日本での全少県予選会に相当するビクトリア州大会でクレイグ先生の道場がメダル数1位を獲得し、州代表の全国大会出場者23人という小学生でも州1番の道場です。オーストラリアの全少では、養正館出身で現在クレイグ先生の道場にお世話になっている流石慶矢君(小3)が、形・組手ダブルチャンピオンという偉業を成し遂げました。流石君は幼稚園年少で養正館に入門、小学1年時に日本の全少に出場した後、オース

トラリアに移住しクレイグ先生の道場に入門しました。今年3年生になって、大きく花開きました。

セミナーの翌朝は、養正館のママさんクラスに参加していただき、平安五段を教え合い、有意義な時間を過ごしました。今回は、お互いの家庭でホームステイし、交換稽古をしようと約束しました。



クレイグ先生と養正館の皆さん。